

The consequences of drug abuse in the family : a study of urban community, Bangladesh

著者	Azam Md. Golam
内容記述	Thesis (Ph. D. in Sociology)--University of Tsukuba, (A), no. 3318, 2004.3.25 Includes bibliographical references
発行年	2004
URL	http://hdl.handle.net/2241/3279

氏 名 (国籍)	アザム モハマド ゴラム (バングラデシュ)		
学 位 の 種 類	博 士 (社 会 学)		
学 位 記 番 号	博 甲 第 3318 号		
学位授与年月日	平成 16 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審 査 研 究 科	社会科学研究科		
学 位 論 文 題 目	The Consequences of Drug Abuse in the Family : A Study of Urban Community, Bangladesh (家族に対する薬物乱用の影響：バングラデシュ都市コミュニティにおける調査)		
主 査	筑波大学教授		岩 瀬 庸 理
副 査	筑波大学教授	博士 (社会学)	菱 山 謙 二
副 査	筑波大学教授	博士 (文学)	好 井 裕 明
副 査	常磐大学教授		佐 藤 守 弘

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、バングラデシュにおける薬物乱用の影響を包括的に調査・分析した実証研究である。薬物を乱用する者は、発達した産業社会のみならず開発途上国においても急速に増加しつつある。本研究は薬物乱用者が 250 万人（人口比約 2 パーセント）をくだらないといわれるバングラデシュをとりあげ、薬物乱用者増加の背景とその社会的・経済的影響の分析、その抑止のための政策的提言を行っている。具体的には本研究は、同国西部のラジシャヒ市における質問紙調査を中心に、薬物乱用が地域社会や家族に与える影響を分析したものである。貧困のみが薬物乱用の原因とはいえず、地域社会や家族における新たな人間関係の構築が薬物乱用を阻止する方途であると主張している。そして、貧しくとも薬物に冒されない社会の実現を意図するいくつかの政策的提言を行っている。

分析枠組みと方法

本研究は、理論的には逸脱行動論の枠組みにもとづいて薬物に依存する人々の意識と行動を分析している。特に R.K. マートンのアノミー論を詳しく検討し、それを組み立て直すことによってより有効な分析枠組みの構築を試みている。特に「下位文化」説がバングラデシュをはじめとする開発途上国の薬物乱用の分析に有効であることを明らかにした。

質問紙調査は、バングラデシュ西部の都市ラジシャヒにおいてなされた。調査対象は薬物乱用者を家族内に持つ 200 世帯である。調査は、91 項目に渡る詳細な質問項目から構成されており、調査員による面接調査である。各質問項目には基本的な統計分析が施され、いくつかの新しい知見が見いだされている。

本論の構成と各章の総括

本論は全体で 11 章から構成されている。第一章から第四章までは逸脱行動および薬物依存に関する理論的検討をおこない、本研究の分析枠組みを構築している。第 5 章から第 8 章までは薬物乱用研究の歴史と現状を検討し、同時に国際連合による薬物乱用への政策的対応の特徴を整理している。第九章と第十章は質

問紙調査の詳細な分析であり、主要な知見を提示している。第十一章は結論と要約であるが、同時に、薬物の供給・取引・需要を制御する具体的な政策的提言をおこなっている。

第一章「序論」は問題の所在、方法の提示、分析枠組みの検討をおこなっている。基本的仮説が4つあげられており、①薬物乱用者は家族内人間関係に関する心理不安が強い②薬物依存と家庭内暴力および犯罪は強く相関している③薬物乱用者を抱える家族内の人間関係は不安定である④地位不安を中核とする薬物下位文化と呼べるものが存在する。

第二章はバングラデシュにおける既存の薬物乱用研究の整理と総括である。既存の主要な研究が薬物乱用者本人を対象にしており、また、方法的にも心理学的・医学的研究が主流であるが、家族・地域に焦点をあわせた社会学的研究としてはバングラデシュでは本研究をもって嚆矢とすることが強調される。

第三章は薬物乱用に関する種々の社会学の学説を比較検討している。なかでもアノミー論と下位文化論が詳細に検討され、その有効性を肯定的に評価している。

第四章は逸脱行動論を批判的に検討し、特に機能主義理論を葛藤理論や学習理論を包含しうるものとして高く評価する。機能主義的逸脱行動論としての R.K. マートンの学説を組み替えることによって独自の分析枠組みを提示している。

第五章は薬物の起源と歴史を整理している。マリファナ・アヘン・コカイン・ヘロインなどの主要な薬物が異なった歴史的発展をたどり、異なった社会的・宗教的・医学的機能を果たしてきたことを明らかにしている。

第六章は薬物乱用の歴史を整理している。種々の薬物の分類が結局はその心理的・生理的效果によることが明らかにされ、現在はハードドラッグ（ヘロインやコカインなど）・ソフトドラッグ（アルコール性や鎮静剤など）の分類が主流であることが示される。

第七章では薬物の地球規模での生産・取引・消費の特徴を主要な薬物ごとに整理している。生産と流通では黄金の三日月地帯と三角地帯の特徴が分析され、消費量では過去10年でみるとコカインやアヘンよりも大麻とアンフェタミン系興奮剤（スピードなど）が薬物乱用の主流となった背景が分析されている。

第八章は1990年の国連薬物統制計画（UNDCP）の成立とその発展を整理している。特に国連麻薬特別総会で採択された国際的な麻薬対策を薬物の生産・取引・消費という角度から整理し直し、麻薬対策が犯罪対策でもあることを明らかにした。

第九章は調査対象地であるバングラデシュにおける薬物乱用の歴史とその背景を分析している。同国での薬物乱用が大麻とアヘンに集中していること、殆ど生産していないのに流通と消費の拠点になっていること、家族解体や地域解体が急速に進んでいること、が強調される。

第十章は質問紙調査の結果から得られた主要な知見の分析と、それが持つ政策的意義を整理している。薬物乱用者の社会経済的属性面での特徴が示される。また、薬物乱用は本人の健康問題であると同時に家庭内暴力や犯罪行動と強く結びついていることが示される。

第十一章は結論と要約である。薬物乱用の克服が貧困の除去だけではなく、地域社会や家族における人間関係の強化と制度化を必要とすることが主張される。そのための政策的提言として薬物依存者の社会復帰のためのプログラムを提示している。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は質問紙調査によってバングラデシュにおける薬物乱用の特徴を明らかにし、開発途上国における薬物乱用の実態把握を一步進めたものである。調査も社会学的方法を用いた研究としてはバングラデシュでは初めてであり、オリジナル性の高い研究である。理論面でも、薬物乱用研究における機能主義的な逸脱行

動論の有効性を改めて指摘しそれを発展させており、その試みは高く評価される。データの処理は簡単な統計分析に終始しており、分析の深みに欠けるがそれは今後の課題ともいうべきもので、本論文の価値を損なうものではない。

よって、著者は博士（社会学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。